第五章　幸福の世界へ行くには

一　先づ自覺團結すべし

幸福の世界は怠惰に待ち受くるとも決して到來しない。社會の改造に對し勞働者は眠つてはいけない。其れには先づ第一に勞働者各自が自己の奴隷的境遇の原因、狀態、打破方法を自覺せねばならぬ。そうして堅實な團結をなさねばならぬ。勞働者が團結することは徒に多數、群を作り世を驚かすといふことでは無い。勞働者の團結は自衛上の手段である。勞働者は一人々々にては甚だ弱きが故に團結を作り自己階級の意思を外部に發表するのである。

二　勞働を愛せよ

勞働者は生産者である。その天職は勞働である。勞働者にして勞働を嫌はゞ、是れ自己の本質を沒却するものである。今日の資本家制度の下に於ては勞働は苦痛であるけれども、今日怠惰に慣るゝときは明日の社會に於て猶怠惰の習慣を殘すであらう。これ由々しき大事である。勞働者は須く勞働を愛せねばならぬ。

三　貧困を恥づる勿れ

勞働者は無産階級である。貧困である。然しこれは却て誇るべきことである。人の物を盜まず、勞働を唯一の財産として社會に潤歩するもの即ち勞働者の本色である。勞働者にして資産を積まんか、これ資本家に近づくものである。故に資産なければ幸福となり得ないといふやうな誤つた考をしてはならぬ。幸福とは自己の人格を自由に發展し人間相互に和樂する精神的快感をいふのである。然しながら一定の收入を堅實にする必要のあるのは申すまでも無い。私たちが賃銀の値上に努力するのは此理由に原くのである。